

## Ⅱ 「リサーチ・フォーラム'99」に寄せて 2

### リサーチ・フォーラム'99への期待

コーディネーター：新井哲夫（群馬大学）

#### 1. 美術科教育学会の新たなステージ

「リサーチ・フォーラム」は、美術教育学会の活動に新たなステージを提供するものであると思う。それは、これまでの活動が、初期研究会以来の「美術教育学の確立とか研究者の支援養成」（『美術科教育学会二十年史』46頁）といったどちらかといえば学会内部の課題や要請に応えることが主たる目的であったのに対して、事務局が「リサーチ・フォーラム」の位置づけ、意味・意義・目的として、「学的課題の提示」「共通基盤の形成」「社会への発信」の三つを挙げているように、外部との関わりを一層強く意識したものといえる。このことは「社会への発信」に限らず、「学的課題の提示」や「共通基盤の形成」についても、社会の変化や教育の現状を的確に把握しつつ、それらと対峙しうる「学的課題」を明らかにしたり、「共通基盤」を築くための働きかけを行うことが不可欠であるという点で、全てに通底する要素であろう。

もちろん、このような学会活動の新たな展開は唐突に生れたものではなく、「公開シンポジウム」にその先駆けがある。「公開シンポジウム」は、1992年11月に第1回が東京で開催され、以後5年余の間に全国各地において20回開催された。その発案者であり推進者であった宮脇理氏（前代表理事）が、「公開シンポジウム」について「美術科教育学会が現実の諸問題とどのような接点を持つかを模索する試み」「実践に携わる数多くの先生方との交流を通じて、学会の研究そのものに新たな活力を導き入れようとする企画」と位置づけているように（前掲書 47頁）、学会の活動を外に向けて開こうとする試みであった。

以上のように「リサーチ・フォーラム」は、「公開シンポジウム」と全く同じ位相にあるとはいえないが、その趣旨を引き継ぐものであり、学会の活動に新機軸を開くものといってよいであろう。

#### 2. 「リサーチ・フォーラム'99」に期待したいこと

##### (1) 社会や教育の現状をふまえて、美術教育学研究の今日的な課題を多角的な視点から議論できること

まず第一に、社会や教育の現状をふまえて、美術教育の今日的な課題を多角的な視野から議論できる点に注目したい。先にふれたように、「リサーチ・フォーラム」の目的の一つに「学的課題の提示」がある。通常の学会発表は基本的に個人の研究成果を口頭発表することが中心になっているが、それだけでは個々の研究を相互に関連付けたり、社会の変化や教育の動向をふまえて美術教育学研究に期待される課題を明確化するというメタレベルの課題整理は困難である。フ

フォーラムを通して、美術教育学研究をめぐるメタレベルの課題が整理され、明確化されるならば、「リサーチ・フォーラム」は学的課題提示の場となり、また共通基盤形成の重要な機会となり得るはずである。

今回のテーマは、『美育文化』誌を中心に展開されたいわゆる「金子・柴田論争」によって顕在化した美術教育の基軸をめぐる問題について、「美術教育実践を行うベースとなる“ディシプリン（規範性）”をどこにおくのか、グランド・セオリーを何におき、どう抽出するのか」（宇田秀士氏）といった視点からとらえ直し、議論を深めることをねらいとして設定された。

このテーマは、美術教育プロパーの問題としてよりも進行しつつある教育改革の動向を背景としてとらえることで、より一層明瞭になると思われる。つまり、教育改革の理念や方法をどのように受け止め評価するのか、そして、同じ流れの中にあることを免れない美術教育について、今日の現状をどのように把握し理解すべきか、そしてその上で今後取り組むべき課題は何かが多角的に問われ、明らかにされる必要がある。

美術教育は、いわゆる「主要教科」でないことで軽んじられやすいという反面、逆にそのことによって社会の厳しい追及からも免れやすいというある種の真空地帯に安住してきたといえる。しかし、学校教育のスリム化に伴い、教科構成の見直しや統廃合の可能性が高まりつつある今日、自らの存在意義を多くの人々が理解し納得できるようなかたちで広く社会に示すことが必要になっている。その意味からも、社会の変化や教育改革の動向を視野に入れた多角的な視点からの議論の深まりを期待したい。

## (2) 「何のための美術教育学か」を問い直す機会となり得ること

「リサーチ・フォーラム」に期待する第二の点は、メタレベルの課題整理をふまえ、改めて「何のための美術教育学か」を問う機会となることである。先にもふれたように、学会活動の当初の目的は「美術教育学の確立」及び「研究者の支援養成」が主たる目的であった。もちろん、これらの目的が今後も引き続き重要であることはいままでもない。

しかし、会員規模が拡大し、学会がさまざまな関心や目的意識を抱く人々によって構成されるに至った今日、当初の目的だけでは会員の多様な期待、要望に応えられるとはいえない。特に、学校現場などで実際に教育実践に携わる会員の期待や要望に応じられる研究を進めること、あるいはそのための方法や環境の整備を図ることは、今日最も重要な課題の一つといってよいと思う。その他にも、学会としての社会的役割を積極的に果たすという意味からいえば、美術教育をめぐる教育行政のあり方に対する関連学会としてのチェック機能の整備や学校・社会への積極的な働きかけなども、今後の取り組みが必要な課題であろう。

もともと「何のための美術教育学か」という問いには、さまざまな立場や視点からの多様なスタンスが内在する。「リサーチ・フォーラム」において、「美術教育学とは何か」「何のための美術教育学か」あるいは「誰のための美術教育学か」といった美術教育学研究をめぐる基本的かつ根源的な問いが、多様な立場や視点から問い直されること、少なくともそうした問い直しのきっかけが生まれることを期待したい。